



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2006年3月発行(3ヵ月1回発行)

第30号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 ●貧しい国々での医療活動を支援 ●各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

## 巻頭詩

### ■ パパ

まど・みちお (詩人・児童文学者)

まど・みちお：明治42年山口県生まれ。台北工業卒。国際的な評価も高く、「アンデルセン賞」その他数多くの賞を受賞。著書に「ぞうさん」(ぞうさん ぞうさん お鼻が長いね……)や、「まど・みちお詩集」「宇宙のうた」ほか多数。動物に関する詩20編は美智子皇后が英訳するなどで、話題になりました。掲載の詩は、作者の快諾を得て転載しています。

はなうたで  
あかちゃんの  
おしめを かえていた パパが  
うひえー！  
と さげんで ひっくりかえった

てあし ばたばた  
かお くしゃくしゃ  
わっはっはっは  
わっはっはっは

いったい どっちが  
あかちゃんなんだ  
こんな うれしそうなの パパ  
はじめて みるけど  
パパだって はじめてなんだろ

バラの かおりの あったかい  
てんしの ふんすいで  
かお あらっちゃうなんて……



まど・みちお「ぼくが ここに」童話屋より——カット/松岡裕子

## 文化と生活向上への貢献

### ■文化交流と「海外と文化を交流する会」の存在について

室井鐵衛（海外と文化を交流する会会長）

フランスの著名な歴史家、フェルナン・ブローデル（1902～1985）の著書の中に「文明の文法」という本があり、これはフランスの中学初等の生徒向けに書いたものだが、その中で次のような文章がある。

——「芸術と精神の輝かしい統一性」 輝かしい統一性とはさまざまな重なり、さまざまな一致という意味である。こうした重なりや一致があるために、ヨーロッパの文明は、文化や趣味や精神という最も高い次元において、あたかも同じただひとつの光をいっぱい浴びた、兄弟のように、良く似た様相をまとうのである。——

これはすなわち、ヨーロッパの全ての国々が同一の文化を持っているということなのだろうか。もちろんそうではない。しかし、どんな動きであれ、ヨーロッパ空間の一点に生じた動きは、ヨーロッパ空間全体に波及する傾向がある。世界の他の地域に比べても、ヨーロッパ空間は一つの文化圏をずっと以前からかなり良くまとまった文化圏を形成している。芸術とその多様な調和“ヨーロッパにおいてはいかなる芸術形式も、その祖国の境界を乗り越える”と…。文化の交流とはこういう姿なのだろう。

ここでは芸術と文化の関係を言っているが、今日的の問題で、地球温暖化という現実的な問題で見た場合、EU（欧州連合）が温室効果ガス削減では世界の優等生になっていることを考えてみると、そこには芸術における輝かしい統一性と同じく、生活の文化の統一という意味が理解されるのである。そこに文化の交流の意味があるのではないかと思われる。ヨーロッパにおいては、いかなる芸術形式も、この祖国の境界を乗り越える。たとえそれがカタロニヤであれ、イル・ド・フランスであれ、ロンバルディアであれ、15世紀のフィレンツェであれ、ドイツアーノのヴェネツィアであれ、あるいは印象のパリであれなのである。

このことは芸術に限らず、哲学もまた統一を目指すメッセージである。ヨーロッパにはその運命の節目毎に一つの哲学もしくはそれに類するものが存在して来た。又人間科学においても、哲学の動きと同じようにむしろ国ごとの動きとしてあらわれ、そうしてすばやくヨーロッパ全体に広がっていく。このことをブローデルは詳細に低学年等の歴史の本に書いているのである。文化の交流とは難しく考えることではない。理解しあう人間同士のよき付き合いなのである。それは善意の現実性であり、必然性なのだろう。

文明とはそもそも形の表現であり、理想の具体性である。文化とは心の表現であり、感性の具体性とも言える。現代はあまり物質化されて無感覚で、物の豊かさで全てが放漫になり、統一性を失った時代になっているのかもしれない。全てが単なる露出にすぎない。露出の変化を感じ、受け取っている時代になっているのかもしれない。知と心の喪失か。

今年は日豪交流年として外務省がいろいろと企画して動いている。当会もこれに参加している。これは本当にいい機会で、いわばアジア文化の統一性の動きでもある。当会が1977年にオーストラリアに贈呈した日本画の巨匠の作品25点の改めての公開展示もその一端を担うも

のと期待されている。松岡朝さんのこの大きな遺業が改めて認識されることになるだろう。

この会が“海外と文化を交流する会”として今日まで地味に、何か人知れず活動しているように見えるが、そこにはブローデルのいう文化の統一性への運動としての価値があるのではないだろうか。アジア文化の統一性への貢献と、そのことがアジアの人々の生活向上への貢献と結びつく。ちょうどUNの今日の姿のように。

この会が長く維持され、地味な仕事でも永続されることは本当に価値のあることだと思われる。多くの方々のご支援を必要としている。アジア文化がヨーロッパ文化に対比され、素晴らしい文化がアジアのそれぞれの国々につくられることを。そして日本の存在がとても意味あるものだと広く認められるためにも。

## 2006日豪交流年日本画豪州展

### ■日本画メルボルン展に想う

松岡裕子（海外と文化を交流する会専務理事）

日豪交流年である今年、27年前に当会が中心となってオーストラリア国民に寄贈した25点の日本画の巨匠による記念美術展が、メルボルンで開催されることに深い感慨を覚えています。

25画伯中8名が文化勲章受章者であり、これらの名画は現在、二十数億円とも評価されています。

この寄贈計画の発案者であって、当時85歳という高齢の故松岡朝は、まず高名な画伯方の賛同を得る為の手始めに、重い虎屋の羊羹を下げては、各画伯の奥様方をお訪ねしたのです。自らの経験から、国際親善の意義、日本の将来について奥様方のご理解を先ず得たからです。マネジャー役の奥様方は、ご夫君が依頼されている絵の順番を、当会のは特別に早い方へご配慮くださったそうです。

こうやって25の作品は、寄贈する予定の前年には全て描き上げられ、赤坂の多聞堂さんが各絵画に合った額装を整えたのでした。

2005年6月に来日されたデラハンティアー・ビクトリア州芸術大臣は、今回の記念展を単なる美術展として終らせるのではなくて、両国若者の美術教育交流へと発展させたいと仰せでした。当会もこの機会を日本画啓蒙の一助にしたいと考えて、目下レクチュアとデモンストレーションの準備を進めております。

27年前の担当理事の2代目子女が現在の理事方と力を合せつつ、この日豪交流年の輝ける記念展に情熱を傾ける「巡り合わせの不思議さ」を感じずにはられません。

当時の写真と新聞記事を掲載し、今年38周年を迎える会の歩みを温かく見守ってくださっている会員・協力会員の皆様に、改めて深い敬意を表したいと思います。

## ■写真でみる 1977 年の記録

→  
オーストラリアへ出帆前の「日本画巨匠 25 人展」のお披露目展が 1977 年 5 月 10 日～15 日の 6 日間、日本橋三越にて公開された。写真は三笠宮百合子妃殿下をご案内する大泉孝 当会初代会長（左）と橋本明治画伯。



←  
1977 年 9 月 6 日、メルボルンのナショナル・ギャラリーにおける開会式でテープカットをする左から麻生和子、松岡朝、大河原良雄大使、ギャラリー館長の 4 人。

→  
1977 年 9 月 15 日の日本画贈呈式。福王寺法林画伯の「赤富士」の絵の前で談笑するヘイマー・ビクトリア首相、松岡朝専務理事、大谷敏治常務理事。



←メルボルンのナショナル・ギャラリー

## ■ 毎日新聞掲載記事 (昭和52年10月19日付)

親善にひと役

日本画の寄贈

そのかぎに情熱女性

85歳松岡さん 5年かけ寄付募る



今年、両国間の文化交流で記念すべきことが起こった。「日本のことをもっと理解してもらうためオーストリアに現代日本画を送ろう」という5年越しの夢がようやく実現したのだ。送られたのは、代表的現代日本画家の手による25点—総額数億円のプレゼント。

これらの絵画は現在メルボルン市内のナショナル・ギャラリーで展示されているが、開会式典が去る9月6日、同ギャラリーで開かれた。ビクトリア州ヘイマー首相も、これを「日豪平和条約にもまさるもの」と高く評価、謝辞を述べた。

これは社団法人「海外と文化を交流する会」(会長・大泉孝氏)が中心となり、駐日オーストラリア大使館、日豪協会、国際交流基金、毎日新聞社の後援、経団連、日経連、経済同友会、日本商工会議所などの協力で実現したもの。

しかし、そのかぎには、国際親善に、その半生をささげた一人の日本女性の並々ならぬ努力があった。その人は松岡朝さん。85歳。コロンビア大学で博士号を取得。専攻は社会法。博士論文「日本に於ける労働婦女子の保護法」は戦時中、米国が日本の社会事情を知る貴重な資料となった。米国での滞在期間10年。「心に残ったのは人の親切の大切さ」だという。

1932年、戦争の色強まる日本へ帰国。しばらくして戦時下の中国へ。南京で児童学園を開く。滞在期間7年8ヶ月。その間、中国難民の救済に尽力。終戦の翌年に帰国。その後ユニセフと共に歩いて17年。1963年退職後、「海外と文化を交流する会」を設立した。

「会」で日本の現代画展を海外で開こうという話が持ち上がった時「展覧会ではなく、日本の絵画をいつでも見てもらえるようにプレゼントすべきで、それには日本のことがあまり知られていない豪州へ」と主張した。理事会もこの提案には賛成したもの、その経費はどうするかということになると、妙案はなかった。そんな中で、松岡さんは豪州と深いつながりのある鉄鋼会社、商社、銀行等へ毎日のように足を運び、文化交流の必要性を説いた。だが、ドル・ショック直後の日本企業の財布のヒモは固かった。でも松岡さんはあきらめなかった。「人の親切の大切さ」を教えた米国での10年間で彼女を支えた。その後、約5年間松岡さんの活動は続いた。やがて、その努力が報われる日が来た。経済4団体が協力を約束してくれたのだ。

松岡さんは「たった一点の絵画でも、それを前に話し合えばお互いの気持ちがなごむ。文化交流とはそんなものです」という。

メルボルンの人々は、いま加藤展明氏の「舞子」や、福王寺法林氏の「赤富士」を見て、赤道を隔てて正反対の国、日本への思いをつのらせていることだろう。

## 会からの報告 & お知らせ & お願い

### ■4/28「感動のチェロとパイプオルガンの夕べ」

2006年4月28日にコンサートを予定しています。人気急上昇のチェリスト水谷川（みやがわ）優子さんと、パイプオルガニスト関本恵美子さんのたのしいコンサート。会場は東京・赤坂・壺南坂教会です。

このコンサートは、2006 日豪交流年記念チャリティコンサートとして開催します。オーストラリアとの親交を深めたいという願いを込めて(社)海外と文化を交流する会が寄贈した日本画巨匠 25 人のメルボルン展を成功させるためのコンサートです。

日時：2006年4月28日（金） 開場 15:45 / 開演 18:30  
(バザールのため早めの開場です)

会場：赤坂壺南坂教会

演奏：水谷川優子——チェロ  
関本恵美子——オルガン

予定演奏曲目      カッチーニ：アヴェ・マリア  
                            フォーレ：ピエ・イエズ  
                            アルビノーニ：アダージョ  
                            カザルス：鳥の歌  
                            C. フランク：コラール第2番      他

お問い合わせ、ご予約は、TEL&FAX03-3370-6786(pm 6～9・田口)まで。なお、郵便振替「(社)海外と文化を交流する会 00130-2-366249」にお名前・ご住所を明記ください。チケットをお届けします。

### ■会費納入のお願い

2006年度の年会費納入さらに2004年度2005年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

郵便振替      00130-2-366249      社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込      東京三菱UFJ銀行渋谷支店（普）2266599      海外と文化を交流する会  
会費 10,000円（正会員）      5,000円（特別賛助会員）      3,000円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6      パインビル内

TEL&FAX 03-3370-7654      e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigaibunka.org>